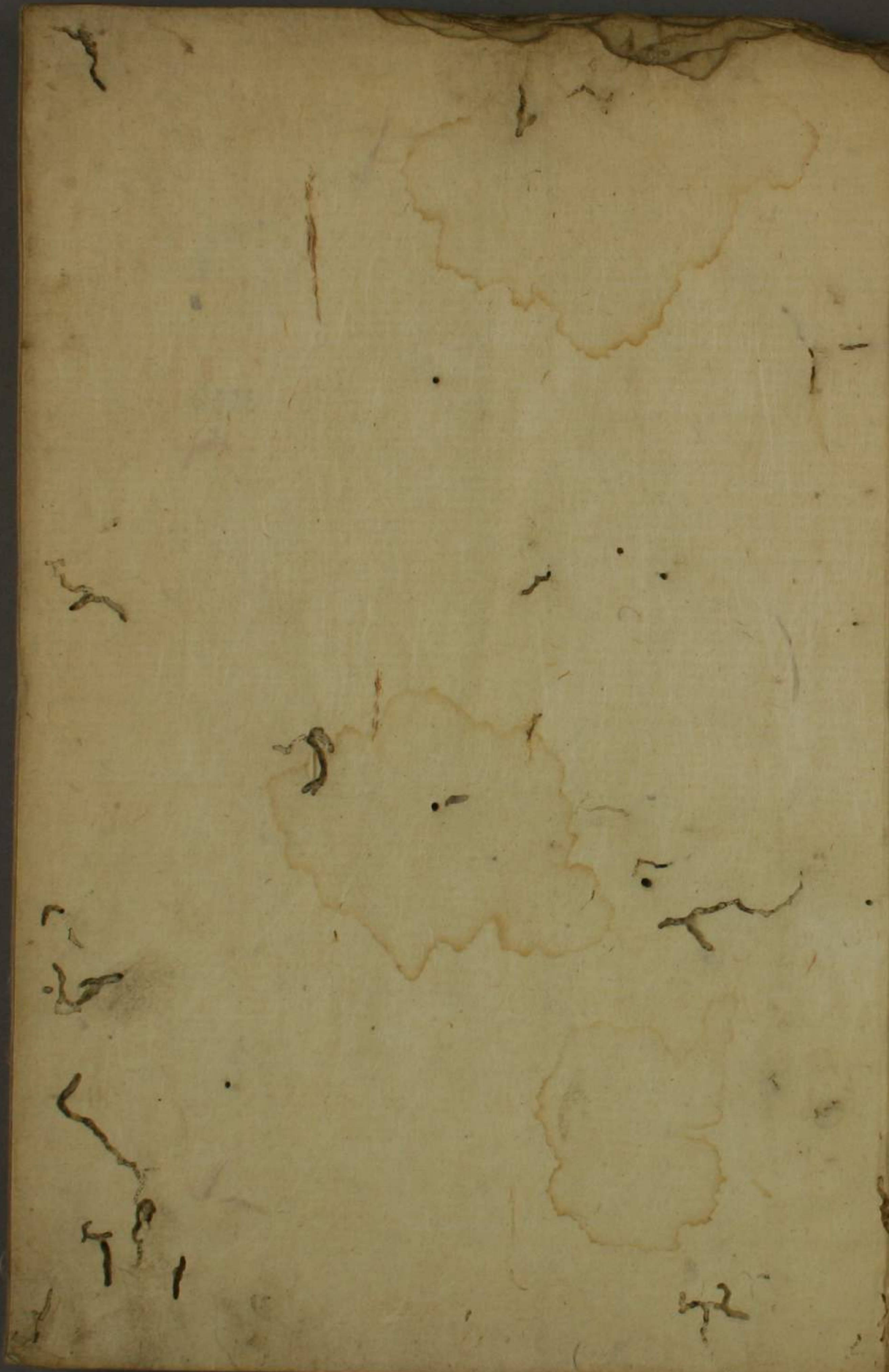




ル 2
3052
1

早稲田大學
圖書部
寄託者田內文庫
寄託書一第
5
第 1 號
第 1 冊





[Faint bleed-through text from the reverse side, including the word "Bible" and other illegible characters.]

[Handwritten text in a cursive script, likely a mix of Latin and a non-Latin language, possibly Italian or Spanish. The text is written in dark ink and is partially obscured by the bleed-through.]

[A vertical strip of text on the right edge of the page, possibly a marginal note or a different script, written in a similar cursive hand.]

奉使紀行小引

大正七年九月五日
內川六子氏贈



紀行一部十有八篇借鈔於岩山下桂窓
曾氏藏本蓋稿本也。雖其所譯意頗不
完。魚魯之訛亦不勘。間又有脫漏。然稍足
以見其概畧矣。此記即俄羅斯列散廼夫
又作列散廼夫
者。奉其國主命。我文化紀元八月
出帆本國。加模沙斯加。致於舟東洋。九月
至崎陽。翌年三月。發崎陽。經西海。歸帆舟。

中所錄而吾報青地盈者譯也其所經
國郡疆域至風俗語音水土山川物產等
皆記無遺矣加之日月星辰經度距離海
底淺深寒熱氣候乃盡則量為想其心中
更無寸隙就中崎陽應歷々細記如指其
掌可謂奇矣只恨颶風漂舟濃霧遮望則
閣筆而空過亦不得已也是固意外之天
時耳如其測量彼最所要也又一逢其未

曾見之島嶼必名以古人名號亦不奇哉
是蓋彼徒為後來搜索者之標的乎遠夷
馭舌之族窺覷如此可憎哉後之讀此書
者以察夷族之事情是為要因書於簡首

天保庚子南至日

苗波老樵山本鄰

奉使日本紀行目次

第一篇

航海準備

第二篇

魯西五國とて諸厄利亞より

第三篇

カナリヤ諸島及びハラシ州

第四篇

シントカリナ逗留

第五篇

伯西見と出帆大洋に至る

第六篇

角岬の經度よりニユカイワに至る

第七篇

ニユカイワ島逗留

第八篇

ツシングトシ諸島記

第九篇

ユユカイワ土人記

第十篇

ツレシクトシ諸島と去てカムサクトカに着る

第十一篇

カムサツカ逗留日本小向

第十二篇

日本逗留

第十三篇

長崎湊の記

第十四篇

長崎出帆日本海航

第十五篇

蝦夷北隅及びアニワ湾の泊

第十六篇

アニワ湾と出カムサツカ着

第十七篇

ラルユレハツル港の逗留

第十八篇

サ、リン東濱

七

奉使日本紀行



吉地盈譯

高橋景保校

第一編航海準備

千八百零二年^{享和二年}八月七日予不令^一予令般無墨利加由西
 濱舟送て二艘の船の艦管の役と以て之を航海に我々稀
 成大業少く予我の心とありて但し予の色を信し船の
 上とユル^{政進巴中舟ホル} 予送る彼等少く船と實今年第十月半
 小葎帆と^{スレ}とあり船も予出り予船といふ我々にあり
 船と實も予艦と容易なるに且も海程好き時良

たうおまを殺の航海に日本國に送り使節と我船に定行
へきの命ありは事の起りいふル千七百九十二年^{寛政四}年^{カトリシ}第二
世帝の母に日本國使節と送りし彼國とこれと交りれ
彼使節と得互降ありし書ふ毎年魯西亜船一艘と長崎
に入て交易とありし但長崎の外行は且敵對の言を
武佐と申ししとわきししありし既ふ十年と経て
りし母の許ふ意をうられいふる百七十年の母と
わく國境をく東方の徳部とお接ししと交と経て
られし殺新使節とありし時^一の陳界ありしと交
経いありししは使節と送りしありしに船を徳部

と會議ししに使節と日本に送りしとありし一年と経てし
徳部を船の交易の利ありしに費ありしとありし
て使節と送りし船の法費い^一西墨利和高館に此事と命せ
りしとありし二艘の船とありし徳部 によりし相
初^一はラスクを日本長崎に送りしとありしカムサツカ若ハコーシフリ
にありしとありし一^一次年交りし二艘をに廣東に船を交
と希^一魯西亜に帰るしとありしとありし

注 此會議に列するはハミユステルカラーフロミンソツロココ
ステルマリニフトラサフマウロハルシレサノフ及び
西墨利和高館の主司あり

日知志への使節に非常の重き任あられ^{なり}レサノツと撰^り
用いられ回帝より「ゴトアトリー」の「ラレラ」章と評され「カール」
「ル」の貴族と得たりぬは^り中^に「サノツ」を^も爵位の貴と顯^し
「薩」の支那と英交^を取^り進^めし^るより^も使節の使事の^の飾^り
小仕の事と隨身より^一侍^のへ^き評と蒙^り致^すと^は佐^の船^の
宗徳^のい^きい^きあ^ら七^百九^十六^年[（]寛^政八^年）[）]ア^ト諸^島に^漂着^セ
日知人とも^に交^り我^の船^を「^意と^日本[」]送^り返^すと^は船^中に^留り
て^はそ^の外^に我^の船^の法^役より^一侍^の共^に法^術に^是あ^ら若^しと^考
用^のより^も白^旗より^一廿^二の^赤道^以南^半部^を采^廻する^の故^に
尤^も星^学に^是なる^人と^要と^しけ^レ「^イブ^シ」[（]北^米フ^ラド^テレ^ウス

は^若譽^の星^学者^と考^へと^考て^は此^の侍^の又^ハ「^ルス
と^ユル^の学^館より^一画^工二^人と^呼ぶ^一の^船に^乗り^てな^る
一人と止め返^しより^一カ^ラ「^フロ^コソ^グ」^の篤^好の^学徒^とは^は
交^の航^海に^意と^用て^セ「^{ベル}」^の学^館に^沙汰^して^ト「^{トル}ホ
ル[」]と^呼ぶ^一の^船に^交り^て星^学の^處に^在り^し廿^二の^学術^を出^し
予^の得^ると^得ま^らふ^一の^船に^交り^て廿^二の^船に^交り^て予^の船^の侍^のを^是
西^のの^船より^一日^十ラ^スク^の二^艘コ^ロス^キド^に名^を予^の船^の侍^のを^是
これと^檢照^して^二艘^をは^善造^りの^船と^し予^の船^の侍^のを^是
多^き船^の大^のの^船ナ^ラス^グと^撰り^て廿^二の^船に^交り^て予^の船^の侍^のを^是
廿^二の^船に^交り^て我^の船^の侍^のを^是「^三」と^撰り^て予^の船^の侍^のを^是

これいあるべうに北を爲に成洋の時也貴はきかれい
予化変とアトニールコスツドフ及び甲比丹ヒユスエレスユイに述て傳
世に傳るる

第七月六日予二艘の船を命し舟繋場より岸下け港よりと
個へを三出帆し一は北に北東コレスタートに去り船と
一は南に南東あり是は西西の旗章と云て陸海より船
おれいあり既して西東少舟より船と懸覽あり二艘の
全目に命して袖上の働と爲りあ航しれ航し我出に命
し予の妻あり予に於て尤幸甚と云且終ふ予の歸にあり
十五百ルウバルの地租と十二年此航より免く與らる是予

後ふ北に後家族の要帳と爲りあめと云予室にを懸傳きと感戴
甲比丹リニアレヌコイハ 前に云く船と買並に船軍需用の品
と集め傳へあり肉は敷血病と防く食物と用意せしむるを余は

及びトナルユスベベルクの信厄利典より買入るる快薬我船に
備り時計六部を内四部はフルラルト二部はヘレリグトこの製とし
時計の予親友ベラルスヒユルリのスキユハルトの所送るる運り
精考せしめ世に由て予今夏の航海に大の益と成せしあり
星学の器を悉くトロタフトこの製あり

ミルクレラフレキレヨシ

一具

セキスタント 紀限儀 測 二具 八

ナルチヒレーレホリワレテレ 二具

ラヲトリイ 一具

アシニエトゴムハス 羅針 二具

海上ハロス^{暗雨儀}ラ^バワ^イテ^レ 一具

ハイコロメーラル 測液器 一具

ラルモメ、ラル 数具

アルケヒシールマグ子ト 磁石 一具

イニキリナトリユム 一具

アコマ子ヲケイアル 星鏡 一具

トタイトルホル子ルグハムヒユルグ^イ持来り及び諸厄利更を買入
たふふ

タウシト、イニストリユメント

セキスタント

スリシケルアラバラ子ユス

スリシケル 時計名

クワタラント 象限儀 測器

ハツサギイ

スリシケル時計

テルモノーラルハシキスレノ發明セル者

海水の性と測る巻

ハロメーテル

エシキトメーテン

ヘイコロメーテル (テリロリ)

アラフメーラル

メートタイフル

その他海図に記す多及びバセハレサリ君より得る月離表は
拂郎察国に精撰多し其経度と算すに必要とす
船中の法徳と撰むに任じり予任るに即我船の第一のリー
テナントはリフテルラトマノフ也用ひ彼王位は在巴に十年と経

軍艦の将りしを拂郎察国よの戦の時に切ありてシトアスキの
ラルテア二位も嘗てん多し其ち第一エウラキントにハムベリと
用ひ彼いふ八百零一年^{元禄}軍艦ナルハに予定ぬ多し其の船の
初に任りし者ち第一エウイテナントにハコサツエツと利也
我々もよく知る人ハに非を能くも衆人の譽多しとつて用ひ
降路シトヘレ島あり不幸に命と失り第四ノエウテナント
にハロノウエスラレと用ひ彼ハ嘗てアトミラールハユフスカ
ソフ及ハコスハコフの船初て六年の後これと難色後の軍
和勝の時彼初と離れて所りれハ拂郎察国ははんと
也ハ予此等の航海あると嘗て来ハ被りよとてベリに

平に其初に昔々しとと船くまのり其人良順州して航海
に多ふことあり船入りユイテナトに左ヒリシラシカセこと判
世者と云ひて去るる人なれり人のこれと稱するに由り
任じし向う醫ハドストルニスベレヘルグヤと云ふ名ありその
術の良巧と知るるトクトルヲトとナツ船の醫とすけし
予の友ヤと能く術と志れりあり コレキートラード
学校評義後 ヲハコツエビラ
を任じし子二人十人船中を回遊せしと云ふ船はけしあり
皆幸に難と終るゆゆ

ナテスタ船の人衆五十二人の月を人船夫と云ふも少時健康
かり仕出帆の事あり内二人と返りし人敗血病に属りし

かり又一人十月前を妻と娶りしはコレと云く愛を懐める
あり船中歸り氣付の二百トベルと恩賜されし予は旅に
伴ふも区りしれたはきき旅路ありし心配あり舟の運賃
と要しし人と云て苦きしむことありしと云ふ

船夫の取扱と多くは諸厄利五とされと買入卧具等も
用意ありし船の糧と云ふ蒸餾水 魚西更都名 ハテレスヒユクと云ヒユルノ

の者不し製し多しと船中を内ありハテレスヒユクの製法は良
品と云魯西更塩少し製する内は二年と経て腐敗せし何の
乳候少し変るるありフワロムコウと云人の製法なりホー
トルハ四蹄蹄の多に産れ腐敗するがれがも多し船中

砂糖と茶い多く船へ攷血病と治しよめられ、船夫等に時
れと共ふに干ルル事覆金魚子ルハセシ船中要用のものを影しく
これを貯ふべしと桶の撰取らるるにそとに捨棄たり
我船に使節と云ふものアリ高館の荷を積むに甚船荷
重く日本に送る品予船積りし後とコロスクリトに着しこれを
積入る甚固う蓋餅塩肉等と積むに重く人衆も
込合て不狭く去風、魚、船の爲に危ありき船の船を
船荷と積りしに日敷を費にあれしころコレに船に
彼地を古酒八十桶を買入時よ積むと一と夫と年を
多し船に船繫場を在りし日我船の荷重く危しと官家

に聞知りて官刃に命じて船に可相きありしとそ八月日
二日其使司船に乗りて船荷の重く且船中の不狭く押合中
を免て去ると使節の従者六人と船の上りし船中に其
をたきし但使節をい中て従者の軍身とあり且従者たり
少壯の今此より船を降りし事も甚意と痛むる事ありし
程に船の使役の二十人余餘り船夫等も減る事ありし
かれも元より船夫を數かく減る事ありし既に
如し正柄ありしあれし事も出帆をきとあり平書を以て
甲比丹リレカスゴイに何事か令し何事か別々の合意とあり
順風と待しし事ありしと

夫、他邦に勝色に倭艦厄利無船夫にも上り、倭艦の如くをたれり
 是左より般二艘の船に「ホル子ル」キレシウス」レストルフ及び「スハルト」の
 外に他國の産をあきたり

ナラスク采組

甲比丹リエイテサトハレカリマセスラレン 總管

マカレイラトマノフ 第一リエイヲナシト

ハトルハンロムベルダ 第二リエイラナシト

ヘラルユロワエフ 第三リエイラナシト

ハルマシローフェニステルニ 第四リエイラナシト

ハロシヒリシクシカウセシ 第五リエイラナシト

ヒリツスカメシスチコフ 第一スラエトルマシ

ワシレイスポロホフ 第二ステユールマシ

トクトルカルユスハニベルグ 第一ケテトスヘル

ヨハムセイタム 外科

トクトルホル子ル 星学士

トクトル子レモラス

トクトルラニクストルフ 理科

千八百零五年^{文化}第六月二十六日船に厄利無船夫の北西
 濱に赴く

ヲットハシコフエヒニウ

モリツハンコーツユ

アレキセイラーフスユイ

カラワラン

セルゲナントテルアルテレソイ

記室一人

帆工一人

船医二人

カハラヒ一人

コイベル一人

ケウブルアケル一人

船夫頭一人

ケルキルルイスラ一人

カノラル 二人

船夫 三十人

厨 一人

使役 一人

右六十四人

子ワ兼組

甲比丹リユイヲナトトリミナレスコイ

ハウユルフルビユワフ

ハテルホワリシイレ

ヘトルゴウユグアフ

第一リユイヲナト

第二リユイヲナト

第三リユイヲナト

ワレモイヘルグ

タニラカリニ

トクトルラバント

ヘテルカエヒチイ

ナラスダに

日本への使節

スグイトラドエレカー花ヘーレサノフ

此外 ナラスダ

ヘルミンハンプライイデキマヨルハニラニ 子 ラールスクフ

カライムヘトルストイソユイラニトベイテカル子

第四リエイラニト

第一ス子

第一内科

西墨利加高館司

船夫 二十人

ヘートルノホツセホフヲート

・スラハニキユラレトソフ

ドクトルフリニキン

ヘードルレターノリニ

学館 畫工

内科及本草象

高館司

其他獵夫一人 雇人一人 不使一人 日本漂流五人 西墨利加毛皮
高館人

ナラスダ總救八人

子 五十四人

使節の後者ハ子ヨル破フリーラリキの外ハ頃日上陸してハレ
スヒユルクに返リ使節とフリーラリキハ子八百零四年及び五年
文化元年二年

にカムサツカに上陸す

第八月四日風東より吹に合ふて夜と揚るに風又西

成七日と云々

平ら歸るの列を指めたるも亦ありやうくに在んはは
引り引れおきぬコレスリト遠る中に平ら族家の強心か
扱はて平ら及び歸るを慰めたるも亦に謝すき方あり
厚えれりぬ

奉使日本紀行

第二篇魯西亞國と出て諸厄利亜に至る

第八月七日朝九時は風南西より南は東よりあり十時は
帆と揚船と出せよフトミテールハニニコツフ船よ来りて
行を視てコンスタートより四里と隔たり番船の處と
送り来りぬやう日晴温くもテルモノラル十七夜やう
物れよハローテールハ暫の月を回りニイ降り天幕の移る
夕へきと云ふ即ち二十九トイム九十九より二十九トイム
六十とあり午西よトルビシンのヒュールトール高燈籠我
船の西東七十四交よ在て一里許の距あり夕八時

セスカル島と南西二十度より午後十時風南西とかり
強く浪波船とマキリ次日も風愈強くと午後
風を或南西或西とあり船の遅くホクランド島の
色よりし之と字廻をより八月十日好晴とあり
陽も強くと船とをの午西山船の測量は従て緯
六分五零三分二十九秒ゲインレイクの東経^{時計}二十
六分四十八分十八秒とあり午後二時はホクランドと
字廻り十一時は月影を測ると四回して経度と算を
測るに従て午の経度と平均より東経二十六分
四十分〇〇秒一時計は従て二十六分四十分十九秒

とて午の緯度を九分五十分〇〇秒とあり南東
に向いて九時三十分シカル島のヒュールトレと船と
八里南差あり午の経度を時計は従て二十六分三十分
七分二十六秒とあり船と一時的に我測算をより已に北
緯と字廻りあり午後六時ハケルトのヒュールトレ及び
テムナルム島とも之より午の時ハケルト島のヒュールトレ
と南東十四分より午後七時を既よ之より北緯とあり
ヒュールトレの経度を我算より二十六分〇七分
十秒とありハケルトのヒュールトレは二十六分六十分
一分十八秒とあり八月十二日緯度十七分四十分

の事な確より日早船の候と揚夕六時半の初はコッ
ペンハーゲンの外船繫場より入り深七尋半あり粘土
の事な確よりコッペンハーゲンを南西よりカネロステタ
ードの塔を南西より入り深七尋半あり粘土
コッペンハーゲンの官司より入り深七尋半あり粘土
改官の令より我々より入り深七尋半あり粘土
修し扱我船を改官より入り深七尋半あり粘土
日繫場より入り深七尋半あり粘土
の役より入り深七尋半あり粘土
スタ及び入り深七尋半あり粘土

下しぬ又後より多し少年と違ふ荷物と揚夕
しむ事な確より日早船の候と揚夕六時半の初はコッ
ペンハーゲンの外船繫場より入り深七尋半あり粘土
の事な確よりコッペンハーゲンを南西よりカネロステタ
ードの塔を南西より入り深七尋半あり粘土
コッペンハーゲンの官司より入り深七尋半あり粘土
改官の令より我々より入り深七尋半あり粘土
修し扱我船を改官より入り深七尋半あり粘土
日繫場より入り深七尋半あり粘土
の役より入り深七尋半あり粘土
スタ及び入り深七尋半あり粘土

学徒ロゴモシクニユス谷人等と観象を以て用ひて
在下の著しと云ふ器を以て石造象限儀徑六尺セニ
トセクトルの十二尺ある共

ヘルセルのテレスコープ七尺ある共
ケイケル十尺ある共及びハコ子及びフリコレットのケイケル
ニ尺ある共並にクレーダラレヲレ器具観象儀の傍に
好き席室也區ありセイヲヘルグ及びその子の住する
所としてビユケアの位あり又此の徑を測るに時計
板多ありコッベシハートケレの良ユアルレットの造る所
なり是を甲比丹早ウユレラルレク嘗て亞墨利加

航海の術を傳へし者なり

第那瑪尔加マツケルヒュールトレと云ふ者をマツベル
早ウユンタル君世役と初め第那瑪尔加洋と實際重
洋とハガクは危き海峡は航海者の為ニヒュールトレ
と云ふ世の危難を救ふと欲し一千七百九十七年
以後以来新なる回廊のヒュールトレと云ふ者なり
ホルンホルムの小島は在る是れと云ふ明と云ふキリス
チアンスウーの塔を以て其の塔を以て其の塔
なりと云ふは是れはキリスアンスウー乃

燈ハ楕圓形ナリシテ運轉スルニ依テ作スル予トシテ
之トスルシテ子機時計の如ク光のレフレクトル
あり黄銅と以テ刻ミセイビーゲル六面を徑ル四尺三
面を此ノ如ク狭ク皆ハ四角あり其光点を
四尺半の距ニシテ置キアウコンタル此の發明を以テ各
燈ハ前大鏡ニ對シ小鏡ニレフレクトルニ寸半ありと
四寸半の距ニ置キ光を受シルニ依テレフレ
クトル六ミュートの内ハ一周旋スルありホル子ル此
諸厄利亜國ノ此の儀トスルニ依テキリスチアロー
の節の最勝ありと稱ス

ローリコンタル君は千七百八十四年^{天明}以後國王の海
を藏シ、其の監守多れを以テ^{天明}而向^{天明}海西の海濱
を星學と三角法とを以テ測量シ其圖を此ノ既
を圖六枚と著シ、是星學巨擘ナリヒコケ君の佐
ナリ

(注)千八百零六年^{文政}予コウレハ一ケニ返ル時已ニ
諾而向^{天明}海西の海濱を星學と三角法とを以テ測量シ其圖を此ノ既
海圖の庫をラーテンホルム^地ニ在テ其造營を奇ト
シ其能ハ其内ニ歐羅巴全部の海圖海路の圖と
集メ有ローリコンタル君又此の歡象と云フ

欲らるの心あり 既よコムコシイ あま の准令と

得てロウエンタルコトとピユケと子貴司と あま コムコシイ
の標的とらるるを 洪耀の月離と案定 あま の心あり

千八百零四年^{文化元年}初め、茅那瑪尔加日煙表と撰出 あま へ
(注)此の航海の最要と云々、所々へへに あま 中へに

障ありて あま 金と婚けり

カールヘルトル、スランビシ、甲比丹及びリトミヲリライト、
廳の役と差多り共、あれを あま 市へ あま アトミヲリ
タイトと觀キ、 あま 是を あま 是の整定 あま あらるる あま 名
譽あり、違ふと あま 庫倉の利も あま 志意と あま 用あり、國主

の箱ハ谷高の安一子法器械と傳へ、茅子法索子
茅子箱個茅子 あま 帆茅子 あま 砲具 あま 昔畫く あま 帆茅子 あま 列へ
ま小箱と書い あま ぬと あま 又 あま 箱中の法器械も あま 前
より あま 帆茅子 あま 又 あま 帆茅子 あま 庫内 あま 傳へ あま あり あま 茅子 あま 書
より あま キリスチア あま 茅子 あま 七と あま 名 あま 新造箱八十四砲 あま 傳
ると あま 見 あま する あま 子 あま 巧 あま 他 あま 稀 あま 向 あま する あま 近 あま へ あま 甲比丹
ホレンベルグ あま 既 あま 許 あま 多 あま の あま 箱 あま と あま 造 あま 弄 あま して あま 谷 あま 倉 あま の
人 あま あり あま 時 あま 重 あま 墨 あま 利 あま 加 あま 任 あま サ あま タ あま ク あま リ あま コ あま 子 あま 舟 あま 工 あま 場 あま と
ま あま 船 あま と あま 船 あま と あま 船

(注)此人、千八百零六年^{文化二年} あま 舟 あま 工 あま 場 あま へ

第九月四日船の荷と積送る多し山内風烈々
外船繋場より出るととて窓門を多め瓦刺布へレニ
ストルツ及び帝家の使節より尾刺布カウヲリトベルラ
並しよき婦人の来訪と得る幸あり
同日小石の観象意ビヨケ若の得る時計と船小石を
是を第九月二十一日より彼處よりヒヨケ若より大陽及び
法曜の測量をして試強きあり

第九月一日

一・二八号時計 コツベニハーゲン の平均時より遅き
一時五十分十一秒九 其加ハ秒四十二

一八五六号時計 平均時より遅き五十分九分
一・秒六分より減ハ秒六分
ベンニングト時計 平均時より遅き一時零分八
秒四其減一分八三
右三の時計龍動ベテルスビユルクロツベニハーゲンの三變
して驗しと比較するを
一・二八号

第四月

龍動

加四秒八八

第七月二十日ベテルスビユル

加九秒三七

第九月一日 ユツベニハーゲン

加八秒四二

一八五六号

第四月

龍動

減二秒六十

第七月二十日ベテルスピコルク

減七秒五一

第九月一日コッベシハーケ

減五秒五六

ベニエングト

第四月

龍動

加零秒七十

第七月二十日ベラルスピコルク

加五秒二一

第九月一日ユッベンハーケ

加一秒八三

第九月七日風狂りて船と外繫場ふちりしに

魯西亞の軍艦二艘一ハ中砲一ハ三六砲と傳り船

して甲比丹コロウの指揮ありて 廿二日未明より

廿三日夕方著しと物と取柄ありしと 引揚八月午後

六時は砲と揚をふりとす 一ルニユルは向ち一タ十一時

より午の間に著し 翌日午後八時より 北西の暴風

起りしに止せしは廿六日滞りし 十八日に空崎西南差西

風と船と我を我を使ありしを 既より時節も遅

く遅滞しありしを船と遣へし 定め 船六時は砲と

揚七時はコロコヒユルグの砦及び番船を射し

号砲七響ありしを 船と應えしと 四時

に風狂り船中の人員半死あり 船二時は

我等舟をカッタカトと出ると思ふもスカゼ
の燈塔もマルストランドの燈塔も見るに始り

ローウエニラル君のカッタカト海國の海を記し航
海共社時の外は南風をカッタカトと出ると
我々の船とまさるものを見れば後より

十七日第那瑪加の軍艦我々の船時より一
ブルと出ると見れば我々の船を我々の船
の傍小寄るをキリスステアランド小向くと見れば

我日て来あ〜風を〜ハローテル漸に降り
二十九トイムニナリニ〜初一時を二十八トイム
と〜忽ち颶風起る南西〜小舟は船を傾きぬ
石得止畫〜帆と帆免ストルムセイルを岸に用と利也午後
四時はイユトランドと二十里の距ふ〜廿四風の石
我船と子口とを〜お漏る〜を〜も〜
子口とを〜ぬ〜の〜風〜
〜帆と増〜風を〜西南差西を〜

と出易〜十九日午後四時は諾而勿
第亞南端のリニデナス岬我輩はテル子ウス諸厄利亜

を解をコムモドレ、シル、シド子イスニアトと記さるる
モトこを子軍と率^卒てテキセル 島の岩ドイッ海と南海
の岩に在り和藪は属を
常^卒敵と待ものありコムモドレ我船不使とて下司と
以て去と送る船を吊る行と祝り午後又倍厄利亜
の軍艦とて十分の帆と漲て我船不寄来るを敵討の
物句をり船少は夕九時の初は我船は寄付るものと
えりよを甲比丹ハベレ又ホルドと云る友を九年前に甲
と云る亞墨利加航海を乞ひる物句は彼船より予を船
少招き入り彼船の暴風雨よ乙橋と換へ夫故よ
シケール子ス碇に船と遣はしとて予彼を信するに予船

の星學士龍節は船を被りて雲をきき出るとは
少を告げを彼を予船を乗しとれを送る龍節
ありては予船の中を我船の時と費を省く
り此の事彼は謝して予船を托しきりぬ
但ホル子ル彼ら船は寄り移るる遅き也予内を我船
も彼船不往いて倍厄利亜濱は寄り又ベレスホルト
の懸意を我船内者二人と我船不使し用し心望は我
船倍厄利亜海岸と云るラルホルト子よありりれ
甲比丹ヘンスホルド少舟をへルハ、レサノフ、ドクトルホ
ル子ル及びマール、フリデリキを送り返り我等並ふ彼と

別る但午序より予姪カテラシ、コルブスを托して船動
をく夫より魯西亜へ返りしむ彼ら かくて予の病
み而後長途の務と勤しき思束あるれを告げて船
より上りしるるあり

前夜我船を軍艦ヒルコアより從て諸厄利亞港と危き
砂洲カレロベルスのるを 吾船は美業内共あり、時を
敢て予中と空王船く 砂洲の所と廻る あり夜中風
逆より吹りたる南北ホレラドのるを 船とまきり
午時の吹風降りたる 信厄利亞カナリ、り、未、潮流
よ逆いふれを我船をゆき、投碇し入而後 風東より吹り我

船を控トハル峡と吾船を

第九月二十六日 五時ケレレウイクの子午規と吾船
より我船航海終路徑交と西より算りたるを告り、宜地
球と東より西より旋回せんとあり 二十七日夕九時ハ
テイスト子の燈塔とをり、六時ハ船のをこがるとして
諸帆と唯マルスルとあり、海より望遠ふコルソリス
の港とをく是を後シト、アト即ちハルモト港口の
東隅及いベシニス城とをり、八時ハカレケルの繫場
碇とをり、子口小達ハ、彼を既に二日以前より此より
告せりと、予西の方を深七尋東の方十八尋の深

たうシント、マウスの城を我南差南東半東に
當る

船此ふ着きるとあるリユイラケレトハローウエスラレシと
此城の上司は使し我船の着を告旦礼儀の鳴砲は
彼らも同様の鳴砲を應きしなり也 答を問ひしは
彼らも答れありしに對し故に翌日船は鳴
砲九響を以て繫きたる諸厄利亞の軍艦より七響を
しつハ城より夫より答れの鳴砲ありしに
予は港口より今意而茶土の塩肉を買入是は春西
亞第那瑪尔加をムビコルグと積入し塩肉の三年と



徑て貯るべき也吾とあるれを答ふとれを買入し
之彼の船は六月分の塩肉を買入りしなりと上左
船中は蒸餅と多く積入るる塩肉と置入るなり
ありあり又大海を以て石以雨を以て船の両側の
漏多きを以て答ふと枯つたと打出さるなり
諸厄利亞の諸漢のハルモウトハボルツモウト及ブライ
モウトの上を最好と思ひ答ふ入判の品と求むるは
皆澤山ありしに答は住むる賈人ホキスるなり
我等は善遇し利を食らざる者あり我昔は彼を
徳を以て好む又ケネラール、コーウエル、ヒルト、ロウレ、

我々慾意を示し、為るの是を帯り、十分は養ふ
者たあり、若くは世の強き、一、時彼等ハルモウト
に居て、其の著岸、其の若くは威し、あり

ハルモウト府を、ち、其の家庭も美あり、
諸厄利亚府を、他邦の客は好む、只、
但ハルモウトと諸厄利亚の、小東諸小府を、
小氏の生産を、諸厄利亚を、政羅巴諸邦の、
と、小氏の勤と、其の、山坑の品を、
其の生産を、之、何れ、コルニリスの、
か、其の交易、其の、山坑品、外を、

ハルモウトの港を、最好の、
府より、僅く、諸厄利亚一里、
船と府の、船と、
唯南差南東の、潮流を、
北にあり、礁洲、船と流、
き、り、マウス、の、邊、
七、年、の、

七、年、の、

奉使日本紀行

吉地盈譯

高橋景保校

第三篇カカリヤ諸島及ブラシリに向

頃風と得てレサノフ君の到と待ふ事十月六日子船ハ
ルモウトに着キ一左ハ廿日未ニカレルの繋場ノ潮不奈
シキ船と出シ初ハ烈キ水風ヲ暫クヤシ東ニ成テ八時
小レサドの燈塔我ノ水角ニ十八度あり十二里の距ハ
六時ハ己小サも是レ成十時ハ計路と南ニ南西ニ轉
テ南ニ南西ニ風浪とシキ船を遙ニ揺上レ候キ
入テ空ニ雲と見タル事ハ甚好ナレハ船の使司元小十二時と

船の屋ふ居あり大洋ふ入りんとする可く此れ睦好の種子
多し長途の航海を苦悩かると人のなれる也 扱ひ
かく祝するも我等の身はこの世をたぬるのたに非ず航海
と云ふことと云ふはわん夫世家の航海の政進巴世國の人の目と
屬する可くして首尾終らねとは遂と若い予身小をう若過ち
何の事名のなきものなり我本世の大世は相かち何共
世更とは損なきい春西更國と侮んとしてるものこれと云ふ
大よ弊の弊又我本世の人も初度の頃は過ち何の白後と云ふ
懲りて此れ航海と云ふ戒じし一なる なるわん予意
と痛むるい 何れかかきと物も予世務に當つたるい道
路かきするよと自ら意と願ふる 世のしハットの燈塔

のそとをかりし比い平御思頻かりし唯速ふ世縁のそ
首尾終遂て本国の譽とせし願ふ自らも再い妻よ逢ふ
ひ祝ふししと云ふ記し自ら意と願ふのあししし
今と船の供役人と云ふは別なりし世う口書小別り
ローウエニステルと云ふは昔と云ふはコロニスタートと云ふは彼も
一番と住むししと云ふは時候と云ふは東海水路の危し所
かれい一記の書は諸役と云ふはさる由かき今危し濱
涯礁洲もなき大洋なきい此形は昔と云ふは習ふるが但船
夫とも云ふは別なりしと云ふは千人長唯一十人そと
月六人の昔と持ふは是のハッサート同の船と違ひにかく定メ

しからず諸船中より多くて病人ありし船夫の食物は海と
その最好を以てコロンスタッドと出せし九週以來塩肉と食
せしは僅に八九食を以て他は船夫も常に鮮肉及び新塩
肉と酒と日々以てコロンスタッド及コッペンハーゲンの船積場
を以て名に新塩餅及び新塩と多く得しは船夫の食汁
は我等より其味かくと諸役のそとより又ハルモウトツ
コル菜馬鈴薯ワイルトアツヘル蔓薯ヲ以て葱エトエト得て
船夫等船は未の時よりも大失を以て其より又船夫
の衣類も多く傷み多きハ發して奇麗清潔なりしを七月
あまつこれと點檢し其衣の汚穢を以て改めのことを

を身體とし清潔よりし予初に點檢し時汚穢なり
しものも其後に右の類の者も多し其より又船
是予船夫と云病は併りしを其より
ヒステルシ岬の島に備厄利亜武拂郎察の軍船ありし
と云いし其より西の針路を以て風に南東を以て
僅に八九コッペンハーゲンを以て船を以てし
其十月八日小緯軍四隻二十分西進十二分零八分の處にて
其氣候の變二十分の中にて四時十分五分五分又毎
夕所謂海霧の光と云ふものを以て其より明かりあり
其十月十日正午に測るに徑を十二分十分十八分の所にて

海を舟り船も風の徐ゆる船の周囲の十二人より十八人
洋の大矣多し遊潭多しとて廿矣とドレヘイ子しの程
とて多しを矣或は南西に遊一又ハニをよ及し遊さる
初大時の以用変して山東の向吹きとけし船も涛に
小西より来りてけしけし唯口コトベゴ、船のり多る
北涛翌日にてし船く静り多る

我船既志所をきく来りぬ走り予船夫は清水一桶とよ
千徹衣と洗ししに利由後船中より多し惜し今
飲も陽とたかども予は飲料は用ゆるが今人の言
任也唯予外の利よハ一編もこれと費しと行るを向り

十八日我船緯二十度零八分十八秒経十二度零一分九秒
六時は播とくサルハ島と望んを我より北見北東二十
二里洋の距ちり望知六半時は、テ子リハ島と慥なる
又半時とて、ピーキも雲より頭を走えし、頂は雪のりて
太陽これと映し格別明く船より廿峰ハ造物者諸
島と集りてを礎とくしとて、予は側東面は
先出傾きあり廿諸山も持てし各々嶺をのり
ピーキ峰の頂多し故に諸山の高きとて、其の峰は
若ピーキも諸山と新きて特とてあつたるを
諸山のよき秀ゆるものとて、其の峰はとて

我船の島の北東隅を向て進み東に航し
此日セントクリウスに碇をきりしに
至るは拂印寮のフコト一艘我船と子口のるやを以
し両側の我船と互怪しとるれりしに
ハ彼よりしりし程をわたりしに
港に入りしに是は拂印寮の軍船と
し奉ふしと為しはゆりしに
の獲とのありしにセントクリウス
を夕ふ時よりテ子口の東隅ボ
我ハセントクリウスに碇をきりしに

カナリヤの間ふよき朝十一時ハ
寄るに伊斯坦布爾のホルトト
船は未だ舟繋場の東側は碇を
に我船の右の方に碇を深三
船ゆく碇と多ふの患なりしに
子口の我より西は碇をきりし
しりしにテスダの碇綱を損
付て水と在しと要しを他我
弟二の碇とハ船の北東二十
北東隅テレドは我より北東

子ルとして我コロノイテルニ異く其他教器と取て彼
等より一めりるるを塔の固定ならざるを為す等
時計の経度と定むるを便驗と取らざるを以て止む
此日サンタクリエスのユリマニナールバツケトホート使船を
未として此地の之を我等と礼過すとの命と伊彼を命
令書と寫し我等に示して従ふを我等前より伊斯坦
所轄の地より一時に此類の命令書に於て上より我
等より何れをも用とせざるを以て此地の高貴アル
ストロシグなるものよりヨロタハ地名のハルイナ
の法司と達ししに彼を巡視と以て判とせし且使

岸及び諸司とを毛布取御簾を及イスレテラレセの女子
等も亦も出て歌聲と奏し我等大に歡と好しり性善の
政羅巴北島の國其南方諸國の人よりして其質樸と異
見えしをれり今に北邊の人より南方の人より同く
と世土人等も今更我船の諸司の船副がとてを化と
せしめたる

予ハ此小道船より二三日と思ひしを我船のフケト
東入りりりやとて判と達し難しとて中よりサフの
のものとラギエナ及オロタに遺てテ、十八のマル
叙し心して此地回帰線下在且南亞墨利かの諸島

亞墨利加
地方の諸司

ともし多く集めりし又オコタハのを傍にタラーケブルトボーム
の千軒圍十尺高二千定根洞半人かあると理科老も
併てそれと教へたりサタクリユス府の家屋長藤かゝるを
ともしその地は巨とせ家の皆大やして洞く樹の狭く造りも
平坦なりと司ハブルクイステブラレシホルラとり人々土人サ一室
築き控親の所とせとアルメイダを谷く他を長僅は右舟も
而已此園の主人等ハ一同の費とせ築くこと大其川は昔人
ありて後より色は地更と評さる又オコタハの賣人バルロイ又
一身にブル石の利権あり是ハ處女マリアテラカレテマリアの爲
是よりく 千製頗巧番なりやとて大人の役も若キユア
建よりく

セルス 自証やエヤセルスはラ子リハ島の
舊種旗ナリて島主ナリ者ナリ の位は島と耶蘇教徒も奪れ
し時は、世々女手に十字と持し、山洞中を去ると是世女の
耶蘇教も化せりし、其兆かり、利権と建て後世も宗
教もるかり、女程多き、對して、シントキリストハル城あり、嘗て
ロルト子ルッセルサレタクリユスと棄れんとて、軍も土人等、常
子ルッセルと打ちたり、我も、世人の言、戦ヒ、と、初の利権
の根かり、信は、信も、承世も、遺と、さ、譽成、な、サ、タ、ク
リユスの土俗、鄙陋なる、孫も、婦女、の、信、放、たる、日、候、ハ、樹
中に、僧徒、の、若、き、もの、地、所、に、て、婦、女、を、淫、姦、する、と、常、と、
又、男女、老、若、の、乞、り、つ、れ、衣、と、名、一、醜、状、顔、たる、其、群、く、

術と不満を研ねるが夫又ハ州竊者ト相新當をん金
世界中に鄙褻振難の土俗の各地の如きいえる更稀ク
とを予えざるは其の鄙賤の者ハ唯盜竊と更とをと思
これ我船よ土人の小舟と寄来り船夫の彼と見守りゆる内
れも猶船の儲物と盗まると毎度やして予終は土人の小舟
と我船不為せしむる更と禁止せしむる

此地ハ伊斯把依亞諸所轄の地の如クイニクレーシナイ盈按法教と改正する官名の役所
官と上司との威權強ク市人と對するの權と取まりア子リハの
上司ハ係てカリーヤ諸島の總督もれも予權を及て彼等が如ク
かゝるも亦ハ我船の出入一時の出来も一バケットホート船を

彼總督より此上司に送りゆく船なりとアルムストコゴの活
りりり徳を此地の政治家ハ我等ハ聞知りゆく事ハ此等此地
の上司カイガレハ思慮ある人をして政權と執も害なく一統
若犯罪の人ハ其權と任とを如何せんや叔市人も官も多ク
寛優の免符と得られも船繫場は往若ハ使と遣うものなり
上司のナリハハ為こを得ることを
時候已ニ過りぬも此ハ猶葡萄酒佛手柑桃梅一本子リースアツヘル瓜葱
アールト馬鈴薯アフル等夥しくあり此等も其諸種も其高價
なり殊ハ葡萄酒ハ今年價高く一ベイプ樽の葡萄酒と
先年を六十一ピアステル銀貨の谷ハ九十七ピアステル

の價とてぬきも長途の航海は取損なれぬ 其價とて
も正とてなるやう其下品たる一樽とすハピステルとて買ふ
予船夫の用ふ当てこれをも買ふなり此地の火酒を悉く唯
伊斯把依亞所轄の無量利加小送り其いし心改羅巴人と
飲む牛肉を高價とて一ホントとハピステルに
當り羊皮を七ピステルの十ホントより十ホント轄一羽
ハ一ピステルとて一ホント但二割の税と派せとるなり
多ハ廿とて一樽と一ピステルを買
我船繫場とて測量數回して其中數と取我船の在る
ハ地緯二十八度二十七分二十秒

経度百二十八號のアルメノ大時計西徑十六分十二分四十
五秒實測ホルグ及ハリラの定より西徑十六分十八分
五十秒百二十八號より十月廿七日サタクリユスの中數時
より早き

〇時二十四分五十六秒加日三十一分四

一八五六號より十月廿七日サタクリユスの中數時より早き

〇時〇分七秒加日二七秒五

ペレニグトン 同上の時より早き

〇時〇七分十七秒 加日二五秒三

ホル子ルリインクイスナイの定より驗より正及し高次の

中教此府の中央北緯二十八度二十八分二十秒經度
西一二八號十六交十二分四十二秒をも羅盤の交二の
アレシユタルコムハスめて致回驗するに

千七百九十二年

寛政
壬子

ヨク

インキリナキイといホル子も驗するに好る是ハ平々せと
分や一早く出帆しと思ひ一故はインキリナトリユ羅盤の傾と
すると
陸に送り遣ふるに由てラベラもこれと十分測る変化し
りふ彼思ふふテ子リハの地より陸より河を航好んと思

テルモトールテルハ我々とお帆し一日最高く二十二分外
還舟中も十九交半より降るこゝからハハロノテルハ
還舟中常よりインの十分の二より出入り大抵二十分
トイム九十及び二十九ドイム九二寸潮の候ハ千七百九十
九年明和六年フレウリトウの驗ハ満潮ハ朔望ハ二時海の海
ハ十二ワートにあり上下法ハ六ワートにあり
第十月二十六日の夕六時我々の品と船を送り去りあり
天京岸の陸地の風も吹き出たり色ハ予今夜の船と
もを度なりと上と思ひ一平は上司より明朝我船を宿りし
告知しあり九時上司法司と門連を連れて我々と宿り候

の序の時より平彼へこれより馬殿九響音とてめ城よりも同
敷と答れとてり

第十二時我船の旋と揚より風を過る南風かりカルテル
シキツブ一艘ハキツラルタル小往く者又伊斯把你船一艘ヲカ
らり来り者も我船をなませと出帆をセ伊斯把你船の
甲比丹其船の病者と陸より上ケ船と欲とてり此地の司を
待てりてを病者もやり載せりての懸きたり
我船センターユスと離れり北風より西と成りて
北東より吹りて陸より吹りて北風より任と船と南風
南西より遣りて朝テよりハの南西端と船より西二十六度

小なる我船ハ北緯二十七度零七分とて夕やむて風南
吹りて小よ吹りぬ翌朝六時カレバ船より楢ビキとて
羅盤より從て小東十八度二十分とてせりて羅盤の先十九度
小東先十九度即零度二十分とて午正の測り緯二十六度
十二分五十一秒徑十六度五十分二十五秒とて翌朝六時より
午正より緯二十一分五十四秒と減り徑十六分十九秒と
増りて彼ビキとて一時的に我船ハ緯二十六度二十
五分四十五秒徑十六度二十五秒とてホルク及びヒビクシ
の測りヒキハ小緯二十八度十七分西徑^{北理}十九度
〇ケレーンイク十六度四十分とて在りて小東先十九度我

人々欲くちかく午正我船の緯十七度六十分レトアラ
海の南西満ち秋より南東二十度分を距九四十八里洋
かり我船と西は南西に向を走るは風流くちく南西
見西と秋翌日午正レトアラ海の南西陽秋より南東
八十六度五十四里洋の距をこれより船と再南見南西
ゆきより今朝我船測る所の月離数回の中程より
午正の徑をより車は徑二十六度十七分零七秒と
時計ハ二十六度二十四分四秒とレトアラ海の南
西満の徑をアルル時計は徑を二十六度二十四分
〇〇とレリ羅盤の差を十六分零六分より西見ちり

線峯海の西の計路を東の計路より昔よりハ諸航
海者の徑試する所にして西の計路ハ常ハ風を東
の計路ハ風全くとるは是の如く又線峯諸島と粟利加
濱の間に計路と取もあり予今希道より向を彼西の計
路と取てカナリヤ諸島より走る十七度の距を圍若レト
アラ海の距を圍二十六度半猶徑を二十七度とち
切て南東見南より東風より向て遣り之船の時ハバツ
サート風の向よりと変るるか廿諸島より大形ハちり
何れかハ常に南西風より若御り之れを 諸島の
を走るハ風を微かりとレリ 恒尋常の計路より

西小西と一交半たれに常よをさるい風なりとも是も
全く必需なり難く又船の測算と校正も為すに
ト、フレトニラ島と見えと要と若く島と離るる六十里の
距りてそまは暗なりし物色も此島よをく二十里より
二十里おむる或い風。此より由り或い暴風雨の中を渡り
吹付りて危きなり予嘗て千七百九十七年後版記諸厄利亞
のライツナブル船よきて印交よ往りし時よ此島よをさるの
危きと験試とせしなり故に此船も彼島より去り離る
や非とも境の常よこふ遠よシントフレトニラ島を望みし時
忽風全く止るる予船と彼地より離るる一矢く

走る微風なり一からフレトニラ島のこふえへぬ成りし物
風を指南東の弱風なり我等、船あり東の方二十交よ
定度一真の北東にフサート風と得るあり但南風若く
西風の烈しき、船をさる所く予舟よは徑交二十四交
或い二十交より西よりさる所と横切ると船を二十交
或い二十六交より西と横切る所の船、南より烈しきフサ
ート風よきてシントフレキユスナイ岬と望みし得ぬるが
伯西見の淺く吹付りてさるる交若風の使く、二十交
或い二十交の正と横切ると船の時、走る南東のフサート風よ交
して北の南よとせし船を北の使に得る稀なりんとす

廿日我船の學士等海方の光の如く由と紀ししとて法程
の儀と申しつゝ終つて光の海方の蕩搖する如く
そそり中に光とたゞしとの如く異なる変と質驗する夫
ハ微密なる綿衣と置と蓋とよきて其海より汲とる
如と注さす綿布と見えこれと初し搦ふ時に綿布の
とふ度く光と察するとの如く高し綿布と海より汲とる
如くも忽斯忽京質一種光と察する様の物つと見え又綿布よ
止とる物の如中に夫と多と償をしとて諸層とある様と
見えも又光をく何とあるか初と終と時に光と察
すると見え九く扱トリトル、ラレケスドルフ頭微鏡して波綿布

と見えに帳の形ある小虫の多く其をと見え初も此頭微
鏡と用とるに其趣目ありたれに其の猶生る時は光
と察する死敗しつゝも光と察する且 固宋の廿日の光
小鏡より見し光と察するの目に同様にわらるる理あり
り又ハ氣中の越列合的京質の多少小拍とて光も多少
何より竹をよ船の水とよたの初め其光と察し水の初
りする時に光と察することあり初め其水の理ハトリテル
ナレシウズ人廿日の考説ありて廿日の末よ書と見え
第十月十日の緯十二度六十分西徑二十七度零七分の交
小板あり水東のバフサート風と得て風猶東流り又東流

第廿五篇
二月廿五日

と変候を以て寒暖候テルモ「テ」は大抵二十一日より二十三日のるふ

小東たる乎廿日の由て務て南東はえふ風は遅くふり
かれ日ふふ二十里の路程と遅滞とをえれ十日
小緯六度六十八分西徑二十一度二十分の交のりよ
午正小當て空ふ雲満て二時よむて暴風雨起り二時
餘も傍きゆる廿初を空曇り風止り其廿二と
とバツサト風は浪りこり前の暴風雨後の風全く止
夫より前の及る風となり午風も粒吹絶え或い卒尔
小暴風大雨ふり天寒温熱をなく船中の人々皆は
難と云ふなり廿三日太陽の光とを船夫等衣とテ
在天氣ハ温温なり乎也意を用いて船夫の廿日に感傷を
するは午配とに幸いそは堪て船中病者所々
しり廿時一七値中ふ二日交つ船の空度そ火と燒
こと救時のるなき一めり廿法を氣と燥し清く其の
良法多疑なきとれいかり乎ラ子リフハにて栲櫨南凡
アールトアツベル等と多し貯へ入レトカタリナに若く一時的
いかりの盡とあり廿席一人は大雨ふ伐てテ子リフハに
好葡萄酒半ララ迄宛朝と盡るを稀キビユラと其ト栲
櫨汁多く出して夕日輝と見えい連小船夫の衣及び其と
乾きいあり廿日の雨と交貯て廿日其船夫の襦袢と

洗濯するの世中橋と前橋の間は渡達と構ひて船夫等を
不慮に寛裕と相しむ。船夫木の暑熱に思ひの外
小苦しめの子小え、モテルモナーテルの二十に交り降る夏
なき時より船夫等猶せうも後を暑熱小成り、
心得しとえ由是魯西亜人の能果もを多し増す性なり
と又由是の二十に交り熱の二十に交り増して苦しめさる
かり十日のる天候あり、我船の進むも僅に二交南の
ゆるり而してなるや、暴風を避て日十六日星より十八里
行つて波は廣り、かり十日とて中流を得二十日時のる
續きゆく南東に向ひるき、路て是の十六のハッサート

風を知らぬ我船少偉二交西候二十に交りをよ
在しなり

十月廿三日海とて東の舟の船をえ付り予
參る小廿船の政羅巴は往りのちり、
小送る書号と託し、と告い我船より一士とて
予の書号と托を彼船をき、つるよを船の亞墨利加
の旗章と建て板太肘亜小往りのちり、其甲比丹赤道以
南小出んと欲し、托を予より託し、書号の彼、喜
望峰小到て夫より政羅巴小送る、
徳川より也

注此書号の千八百零四年 文化元年 甲子 第六月小魯西亜子

達せしころ

叔彼船の遣る徑を我亦徑を相違しこ亦も西
し彼の計路を東より西に改めし我時計を測るの
徑を彼より西より改めし計路を變て夜中我
船は停いりて翌朝最早に船を起したり
又十月廿六日朝十一時我船は西徑二十度二十分ありて
赤道と横切ぬ是サレタリユスと出たり二十日あり
即ち碇十一郷帯我魯西再大帝の威光と認て始りて
赤道以南は南徽章翻しとて祝を叔海神祭の
儀式と成し船中あり予の外は嘗て赤道下を

未だこの如く儀式の役と為し人々を驚かした船夫。
一人の女あり思ひてはよのちの女。鋒を拵て子ヲ
トキユス海神祭に装い舞を踊りて後より既よ儀式
を習ふもの如く是れ其の如くあり
計路をキリニタード等に向て取らバフサト風の
南より潮は烈しく西より

注赤道下の潮流緯八度の遙くは南西先西及西先
南西より廿六里あり二十里にわたり流る如く
我船既南緯七度よりニタートの子午線と横切風流東
より流る計路を風の搖るるを以て南より速くをり

多ふ潮の西流する處に下をきく所の船の多き所あり夫
より東風が吹くや及水西に吹く所既我がサト風
と得るより日く船はホニテ碇とて鋒と投てこれと捕て
船夫等も其味の食より又一箇の碇と得ホニテこりハ
味方よりこれをも食しより我船は在日本人これと
食しよきしきしゆくラベロウセはマスセシラ等其の百年
代諸役をテリニグイト等の西七家より南緯二十度十分と
二十度十分の所は在りしと記して我と尋て我と費し終り
これと記し得るなり其由てスロウセは疑と記し得るナ
リニグイトとマスセシラ等同一緯度を在りしハ其各と

橋ノ記よりその船はシシレイル南海航行記より其
るにハシレイの海図よりマスセシラ等と載る彼又マス
セシラ等より希しよりに即ちマリニグイトなりと記さる
此島の考の猶諸説ありて其後一定とて是より記さるも
ホマスセシラ等の宴と明よりしと記し彼ラハロウセの計路
よりハ救交西よりこれと尋人としてラベロウセの記述と撰述
より人の考より彼らマスセシラ等と尋ぬるよりハ其より
と記し其考よりハシレイトハニユアラの後ハ以前タグレスの測りマス
セシラ等の徑交ハ把理斯の西二十八度と記さるラベロウセは夫より
西よりと又掃郎祭の航海士レビよかるより十七百九十一年 寛政二
年三月

彼二考と測りテリニカト考ハ緯二十度二十二分アスセシテラ
考ハ二十度二十八分トモセシテハ、徑を測るの器と取持
りしめてアスセシテラの徑を測り海をとりしり伯西里海濱よ
と海上里數百二十里意太里五里數二百六十里の距なりとせしよ
於てアスセシテラと尋ぬるの緯二十度二十八分と徑して西よ
測りし必それとえり支さるる一而して世とタラシスガレシムル正
及いし他、後此考一久疑ふも、世考と詳よりる支と得べき也
又十月七日の午正載船緯廿九度四十七分徑二十二度二十分
ハ在アスセシテラ考と求めりテラウセの計路より東方の支も猶
二五半なり世の中予其考と巡りしり、世考の夜中船と

をりし、曉ふむりし、子よ、世と緯を、從て計路を西よ
取り午正よ二十度四十七分なり、烈烈、夫より二十度二十八分
より、數里南より、廿日、天、晴、朗、なり、と、維、船、上、り、隨
分、土、星、より、十六日、より、一、眺望、より、若、廿、緯、ふ、ア、ス、セ、シ、テ、ラ、考、の、
子、考、の、橋、と、を、り、二、倍、と、え、也、一、船、と、を、ち、を、と、え、外、一、と、一、
かり、かり、と、候、七、時、の、船、と、風、下、の、空、下、よ、緯、二十、度、四、分、を、徑
二十、八、分、二十、六、分、なり、を、曉、の、總、の、帆、と、港、を、西、を、を、り、午、正、
緯、二十、度、四、分、五、十、秒、徑、二十、六、分、十九、秒、なり、子、の、船、も、我
より、二、里、洋、中、と、り、り、れ、を、若、島、と、え、り、橋、と、り、り、を、
去、り、と、り、得、り、一、と、を、地、を、り、竹、の、音、信、も、かり、なり

曉七時迄アスセシヲ寫すとす一求め我船の緯二十交四十二分
二分徑ハケレイレウイクル一二十七分〇〇把理斯一二十九分
二十分と是加ゆるベラセの計路一西二分十分タラシスの
計路一西一分二十分なる地一北極の緯一南に
離る九里不過と地一ふれと是の地一廿四で只ふアスセ
シラハ 距著圖二十一交十分より二十交十分ケレレイウグの子
午規より二十七交〇〇とある所一又伯西里濱と
距二百二十里より一とある所一是も疑ふ所一疑ふ所一
レビヨリ屬一西の洲ハ一と緯と量る交洋よ新とある地
も拂郎察の航海士ハ 世不務洋と稱するものナク抑又

ラベウセ 廿四と地一と疑ふ所のせよ一其撰述者の後ハ
非ケル一予も何と能く一とよか一予ハ為メアスセシと
求ると一後の航海者ハ 簿一アリヲ岬ハ向て船とをい
廿岬の緯ハ予も詳ふし一交と欲する地ハ一竹島廿岬の
緯ハ諸説あり一二十交零二分より一二十交四分中ハ一コレイ
ツサレセ、テス、ラムウス諸の測一ハ 二十二交零二分と一カラドフミ
の後も亦同一マナルテ子イハ 緯一十二交零二分と一と地一を
二十二分零二分の誤写なり

注甲比丹 フロウグトシフリ岬の測を緯二十二交五十九分
四十一秒西緯四十一交五十三分十二秒と一トサの

表もフロウグトに同くフリヲ岬の緯二十二交五十四分徑
四十二度零八分十五秒の如く計算す

マカルテ子と拂郎崇めて得るものと彼得字の二十二交零二分と
二十二交零二分と改めより廿五中してコレノイワサセモカラトフシ
も得とちりると之も甲比丹コークの初次航海記より千七百
六十八年明和八年

弟十二月十二日アグネフリヲ岬と見し時正の緯二十二交零六分
ウシリヲテヤシとみりて時正の緯と東より西より一カ所の
廿岬ハ午正の交と違ふ一カ所と極まり予に其二十二交零
二分から一カ所と疑をも何れにシレ、エラスミス、コーウユルの中

測る所も亦極まり予がくハ廿岬と見し時正の緯と廿五中
とみりて午正の測量ももたせしと違ふ一カ所と疑をも何れにシレ、

弟十二月十一日我船緯二十二交零六分徑半交半分午後
七時は海深と測る六十分半と極地から噴ふフリヲ岬のフリヲ岬
の節は在深岩ありて号と二分一十午正は我船廿二番の中央の當り
我船の如くかりし極まり空星より太陽と見しを為す我船と空
しくより午後空時で船ハ全く初かり廿岬と得て盤計
の是と云ふに太陽の 測る二十二交二十一分より二十二交零
六分にある中教二交四十九分の如東見と云
弟十二月十二日我船二十二交五分半八秒あるフリヲ岬と

我々の西五十度二十分其距二十八里より二十里ある
其距を測りて測りて岬の南緯二十二度五十七分二十秒を以て
此を以て予の測りたる岬の緯度を以てフサ岬の緯度の測り
はとて一即ちトカタリ十島より一八號の時斗を以て
是より十二日の経度と推して此岬の経四十一度三十二分〇
〇とて実測は從ひ四十一度三十六分二十秒とて

注此実測の算は第三冊中ふ載り

夕七時フサ岬北西十度より一八里より二十里の距あるを
予針路とてふしトカタリ十島は向ふ空暗北東風あり
して八時は海の深四十尋の空に到り夜中船を進め曉は

アルレット及カル島を見る此を以て空を以てトカタリ
十島と見得るに此海濱及トカタリ十島は入海口の
好図なり是故に彼見し一岬はトカタリとカル島の
や蓋と詳しきと午の測りたるを明しとて此岬は
向て西と遣りぬ午正の空暗し雨ありて測量と得るは
ゆく其後よき空の晴と待てしと定めし十八日船を
南緯二十六度五十分二十九秒あり予針路を南より
海濱の礁島と詳しきと福とを以てと船を波東杜瓦ル人
の海濱にトカタリ十島の図あり但測量の詳しきを我々の
し一図と撰し即ちトカタリ十島の伯西見の大陸の間わゆる

入口船繫場其海口の前の。諸小島セントカタリナ
の淡我等々入る。西と載と蓋ベルリンの集る。海図の
第ニの五十七ある図の外多ク廿五の海図と云ふ。且
へりこの其図も差謬多故我等々著る。其の図も新羅と
しえん。午後に時風全く止こハローラに忽然と
降り暴風の兆と顯し。降る。此より此記を暴雨と船と
陸の方より吹遠くけられ翌日午正は風は弛こもれ
再び陸より向て船と遣り。午時の曉陸地と云ふ。舟り
此き。南の暴風きて船とわよ吹送る。此カル島の方
より舟り。終日船とをいかに此をい。わん。い。

青昔

夕に當り一艘の小船の我船に向て来りあり我等々れと
けて船轉し。舟りに此船を波京杜瓦ル人の使して我と
導く。アルハントとガル島の。危き事なり。二島の
間ととて深み尋半の。即ち十二月廿日夕五時
ケレイの地は碇とりて。アトメレイ島のサレタクリユス城に船
より西十度アルハンド島の中央に。東三十五度ラト子ス
島の南東十五度ホニタ、ゴツサハ北東六十六度サレタカリユ
は我より一里セントミギユアルを五里の距り。

己亥十月廿五夜起業六夜卒業霜威稍薄
翌七夜與兒直讐比一過時報三更

輿地誌畧 青地盈ノ説

○東方大陸ヲ分テ三大洲トス政邏巴ハ其北西ニ在亞細亞
ハ其北東ニ在亞布利加ハ其南ニ在西方大陸ハ亞墨利加
ニシテ分テ南北西部トス

○火山之亞細亞ニ於テハ馬路古諸島ノ火山如摸沙斯如
之火山云々

其膚色ニ於テ著レキ別アリ亞細亞政邏巴ノ人ハ多ク白色
亞布利加人ハ黒色亞墨利加中時ニ其南方人ハ銅色ナリ

奉使日本紀行

青地盈 譯
高橋景保 校

第四篇 シントカタリ十返留

我船碇すゝと間ありセタクリユス城より一吏出来り
て船に至り我等々著岸と賀ス翌朝ハ一節將自ラ
船に來りて我等ニ見へ且我等と總司の居處に至ラ
一此此地の總司ハドレ、ヨレセスキユラドト名づく其居所ハ
ニユヌストラ、センホラ、デル、デスラロト名づく府所ニ我
船の繫リ一處あり正南九里半と隔つる所ありコト
此に著すると直に己、甲比丹リシヤンスコイ及び他の
船中の士として總司の處を訪るゝ免りぬれ彼より七

親切の答ありて何事をも我等と助らん有し
予元此所を逗留するに成るに久しかりぬやう
らんを欲し徳司の居處まで我諸事と并らん
速に行届くべしと思ひてあり然るに又彼より
吏を命じて我船を来りしめ我買入へし諸品
の目録を取て存内並に陸地を極く速く之を求む
とあり又我船の薪は入用程陸にて伐取しと徳司
の云ふれども此地の暑熱は我船夫等も此業を
作らざれば身の為に宜しかりしと予も考り
故に特は之れを彼に請求て之を買取り
叔我等の測量所

よハアトメレノ島の内にて之を構ゆべしと徳司
の許し得是に我船の諸時計ハテ子リハに至る
以後甚く変差ありしを以て測量して之を正し且トリ
トル、ホル子ルハ改羅巴人よ珍なりとす南緯の
天象を測驗らんを欲せし為あり

徳司の親切にて彼此の用を速く并し我等大に
悦び予其夜船を返りぬ但使節ハ従者と共徳司
の許し宿し徳司其宅の半を使節に貸し居
しむ予船を返りてサレタクリユス城へ礼儀として
鳴礮十三響せしむ彼よりも答礼あり此日城より

節將及び一二の吏司我船より来り食す予一司と陸に
送り我船に水を取汲入且水桶を修復する細工場を
借りんと請ふ彼よりサレ、ミギユエルと云處を差圖し渡し
りる、狭き平地あり水の一瀑布より桶を以て米
播車に仕懸りり水を取、尤も良水にて且之を取汲よ
難かり三日の内は百と止餘の水を船に汲入たりトク
トル、ホル子に此日其處を觀象の臺を建じ板船の
諸勤に衆人勉強しかり、故に予の思ふに此
の十日許の内は、出帆すべしと欲す然るに甲比丹
リシヤンスコイ予に告て云子り船の中檣と表檣と

甚く損へたり、全く之を新に仕替へられ、有べく
す、併此處より、檣材を賣處しあり、其二匠も、
ぬ處あり、此事、甚く難法あり、且子り船の
此に数月滞留す、然る時、予速に此處を出帆せんと
欲する望も挫けたるあり、先差當り檣材を得る所
あり、予究へたり、總司此事を聞て直に人々此近辺
の林にやうて檣材を用へ、大樹を尋来り、むら、幸に
林中に其樹を見出たり、れども此を海辺まで引出すと
又容易あり、是も總司の助勢にて諸事を調へ、
此造作の爲に日数五週許を費し、出帆を遅滞

トクノ事

右の事の出来一に因て予ハ船ニのモ居て他ニ出ル
事ヲ得寸此地の屯聚の委一ハ様子ヲ見聞するヲ
得寸然モ予此地波爾杜瓦爾人ニ對話するの益ヲ
失ふハ一ハ予人ノ見る所ニ違フ寸理斯波臣ノ
の改令の惡一ハ予モセヨ其勤ヲ忘ルルモセヨ理斯波
臣ノ宝庫ナリ此屯聚ヲ衰微スルハ見ヨ波爾杜瓦
爾人此地方の屯聚ナリ出寸利益ハ多クあり予ハ
ハ更ニ論ズルハ及テ予ハ此シトカタリ十島及此
ニ屬する陸地の部ハ伯西兒全部ニ於てハ甚ク僅

あり處ありとも波爾杜瓦爾人此ニ厚ク警備ヲ
設ケ其費少ナリ寸但此地氣候宜シク物力豊腴ニ
シテ其産する品高價あり以て此ニ用ゆる所ニ
償少ク足るあり

此より方位
の名を改

シトカタリ十嶋ハ陸地ト二百尋許の海峡ニて別を
セ發の間より未下の間ニ嚮少長二十五里^{海里}幅八九里
或處ニて唯三四里ニ寸セ發間の隅端ハ我測るハ
南緯二十七度十九分十秒グレシーンの西徑四十七度
四十九分二十秒ニ寸予考ハ此島ハフレシール人初テ
これヲ記一初テ之ヲ圖ニ載寸其圖ハ前後の著あり

後あり者尤詳あり其國を比し見らば少の差有
のミツシールは次はロルドマリ人あり而して彼は之ヲ
記載する少し千七百三十八年元文ローレルデボウヘト名十
七百八十五年天明ラベローセ人俱に此島を襲しあり夫より
今に至りて十八年と経れども此島は於て別々変化セ
し事ありし見ゆ當時此地に中等の塔三ありて
要害とす昂ホシタ、コロサ城ハ、シトカタリ十島の西側
に在サシタ、カリユス城ハ、カトリメレイ島に在又一小塔砲
九挺を備る者デ、ウト子ス島に在其砲九挺の内三挺
のみ用のへ、品よりサシタクリユス城ハ、此中に最好とす

我此處に假に觀象臺と設けし詳に之ヲ見分せし
あり此城に缺事とするを更とモこころし人名ラバロウへの此
船は宋組たる者
書簡に記したるを實觀し見ゆ此に唯砲二十挺と
計ふ而して夫れ多く損したると見へて兵統に
五十人あり是故に此を襲取んと計りし入千七百七
十七年延享伊斯把你巫人の如く大に兵威を用る事を
俟てて容易に勝し但此處を守り此より
接する陸地の一分を併せ有らば非僅に為し難し
更あり前のて、無益之を襲取事し止むた
形人ニユストラ、セコハラ、テラ、テストロの府に猶此より

も守備と缺りと見へ小砲臺に砲八挺あれども其ジキカ子
朽腐し用は達へずあり。モシコロシの紀は海峽に小砲
臺ありとすれども今ハ既ニ見へ寸此處の兵九百
許は寸而して伯西思フラスより毎歲理斯保スホ兵を送る品ハ
貴重の剛金石許多及び二十億クリユサド貨錢名あれ
共此兵の需用銀ハ既ニ牧羊來配賦するありと
あり此にて其改令の悪しきと思ひ遣る。一此兵
の飢を救ふへき為は日ハ一人毎に二ナレイス貨錢即
伊斯把你亞貨七百五ピアステルレイス三十七分の一あり
然れども彼等の著服ハ甚く見苦しかりしをさるる是ハ

此處の總司及び重役の者より意を用キツクりり債借する
の惠よて理斯波リスバより彼等の需用を給するまでを
即ち了事あり此兵の隊將たるケーフケーフ名譽あり
るハスコ、デガマの裔ありて此屯聚して名流にて千七
百十五年ラベロウセガこれを襲し時彼の家ドレハカレト
ユラ、デカマ此兵を將として指揮せしあり

此地の府ハ僅に数百の卑陋の家ありて一三千の波
尔杜尾尔貧民と奴隸子ゲル里人レは住す總司の
館に兵卒の舎とて此處の第一ハ構築とせり予此
にて一寺を建立するの企ありと見る蓋カトリキ

派にてい旅箱及び其他要用の場を閑くよりい寺を
建るる貴とすれいあり或時予夜十時よ小舟あり
上陸せしり里人の男女衆く石と櫓い運ふを見て
驚きたりい如此法教と崇信の勤と致すい此所良
家より寺と建るるを啓る者ありよ因て里人等の
此事と勤るるありい知りぬ

徳司トシヨセスデキユラドの支配い南緯三十一度西徑五十
四度よ在るりリガウレデ地^地り南緯二十三度三十三分十秒
西徑四十六度三十九分十秒よ在るシント、バウ^地の運上
場とてと支配するあり

予此徳司の租入の詳説と聞くと得ず然共察する
よ僅よありい唯其濱海の地よの居人あり其
土人の表徴^りよ由て推察すい其表徴の因る可
軍戦ありしよ非ず唯土人平和の時よ互よ乱妨と作
すよよあり持よ波^ル杜^尾^ル産の畜と争ふあり
島上し陸地の濱も其土の肥腹ありて多く哥喜
砂糖と産す^リニム^ニ飲^料の^名ハ^ハ牙^賣加^の産の良か
たよ及いすとい^も其年と経ると運輸の宜い
シトコロイスの産よ劣ら^ず然^るも他方の船
此^の物と買ふよい唯貨錢と以て買ふの外土人

其産物と次羅巴人の貿易するを許さず故に土人
全く物と賣るの意あり此は由て交易の事を行われ
ざるあり是を以て此は産出する物も唯自己の用を
供するに足の外に用ありとす但毎歳一兩度七八十
ト一の船に産物を積りてリリヤ子リリヤ地へ運りて其土
産及び次羅巴産の品と交易とす是はリリヤ子リリヤ
より此地方土人の缺べりたる品物と交易し取り
為しある所あり哥喜及び砂糖の價は予り此は送
留する時ナゴラ量各三
外七合一ポントサユム一ペイブ
主ビアステルより下り猶之を多く買ふ時

其値ありし減り得べりとあり此は良材木多し
予其質色の良ありるる品八十種余を集め得り
但土人の此材木を他に出すに嚴禁す波爾杜尼
改司此島を公港とするをせしむるは此は利
益を収むるに為あり然し其指揮は多くの法
制を設て交易の道を狭しめられ其率沮廢し
笑ふべきに至る材木の此地方最好の産物とし及び
其他品も皆現に貨錢にて買取り外に許さず
是故に次羅巴の一船にして此にて貨を出して其哥
喜砂糖及びユムを買ふ者あり然らば此島と

よの可属の陸地の濱にて四百トの一艘の船に積
へり、荷を見るてありの理あり是土人其産物と
リテ、ヤシリヲ運する外、他は出せずと禁せらる
を以て、かく表徴せらるあり石鱈ラハ等松備ハ此は甚小
少く土人已に貯蓄を以て我等此に替んと欲す陸地
は少く歩を入るハサツサラス樹カレウム、リシヒの出る
板にする樹を夥しく生す然ともトクトル、ニスベベル
其油少許を得んと欲して此は貨を出しられとも得
ず能む寸我近人を陸に遣り、材木と求むるハサニキ
コルより僅に二里許の地は、大船の橋とすへり、樹と

得たりと知り、子ウストテ、セホスデル、テスラロの府は一
買家の住する者あり若中等の富戸ありて其官許を
得て此に居て商賣を為すあり、其時の久きを俟い
して大贏利を得のみあり、寸猶此地の産物の生出し
大に盛あるに至る、此に由て速に教艘の貨室を
波尔杜瓦ルに運輸すへりあり、彼政羅巴トシトカ
タリナを以て公港とありあり、常に土人の交易
を廣くするても許す、已に公港にして其交易を
許さず、自ら相矛盾せりと思はる、何れや
鯨を獵するても、近此より官司小買上とあり、是れ

勤め行りし時、其益多かりし然るも波原社
尾原の政令あり手狭り仕方あり、此地方の租入
にて成卒諸司の需用を給する費用の半を以て取得し
て難かりし是此地方の窮迫表徴する可き由
ありん

ホシに押して渡り或は鯨獵の此海濱を為人と欲
する船の繫泊を宜しき港あり遠くリヲ、ヤブイロ
と某撰に当せしむ彼處にて他邦の客及び買遷の
者も常を異しと見て和親の取扱を為しりし猶
日本に於てする如しコック及びバシックスも其処

より尋常の説話を彼土人に自ら侮欺せりやと
心得て彼等、為に怪しみ疵つけらるるありしこと
カタリトに其近辺に金剛石地ありし他邦の
者此上陸を禁せず其港最好にして水を得るに尤
便なり薪木の價を論せず人の代取るを任す彼
伐て船を送り来るに子束に十ピアスラを償ふて
足りし寸其木の長サ三尺に餘るる候を善とす我船
夫等此に停留する七週日ありて何れも壯健あり
— 初め此に著す日、船夫諸人疝痛を發せし、教
時を待て全く癒気候の熱あり、此の夏はす好

第一月の極暑も甚しくかゝすテルモメーテル船上にて
二十二度、過す日、涼しき海風吹て暑を和らぐ。穀果
の類は豊饒にして價賤しく我等牛一頭四百ポンド
に重しあるハヒアステル家一頭二百ポンドの重しありて
ナビアスラリ雞五羽と一ヒアスラルにて買たり。香橙
狗椽は蒞りて早く熟す然共我等数千顆得
たり西瓜南瓜尤夥し但我等逗留中に臭い多し
かりし此は暑熱の時にて漢に便ありし故に
て否に臭し元より饒多ありて此に用る丹にカノ
ースク一木を刮て作りたるあり其内は長三十尺幅

三尺餘ありを僅に見たる而已舟幅狭く之を過すに
むし疾し然し海中に少し波ありし時、曾て舟を乗
出するあり

我等此に著りし時、此所に諸厄利亞の力へし單船二艘
並に奪取らんもの拂昂察船二艘と見ら其拂昂察
船は鯨様船にして其船主等ハ亞墨利加人ありり
彼等の意に此地の總司は止めらんことを察して
其已の船を恣に諸厄利亞人より屬しりあり我等此
亞墨利加人等々所為の宜しかりしを察しり、終に
波爾杜尼原の總司より彼等と執へ字を入拂昂察の

改官に引渡す事ありたり。又諸厄利亞のカベル船、
諸厄利亞國に伊斯把你五國の軍艦あり、為よ伊斯
把你五船一艘を奪取て此カタリナ港に運來り竊に
其船荷を賣拂ひ其船を砲十六挺を以て備へ船
して之を此處の船繫場の上遣りて番の船の
として此港に來る諸船を改め見しむ然ら
ば波爾杜尼爾の此港に番船とする船將を以て見
て其守りの軍船と此處を計て一軍船砲十八挺を
備えふりを仕出して彼カベルの船の甲比丹と紀
尚りしむる。彼此勢を大に驚きしむる其番船の

とて艦一たり。伊斯把你五船と佛郎察船の一艘
は之を運きしむるカベル船と今一の佛郎察船は
此地總司の手に取きしむる。此砲十八挺備えしむ
軍船は總司より諸厄利亞カベル船を取押へしむ
為し出りしむる。

我等此地方にて験試せしむる航海術及び測量術の
事務を此に記すしむる。此港の内より船を以て差支へ
かりしむる。あれは此處の地図に最も詳細にして言
は述るしむる。委しむる。画したるしが几島とアルハト島
ハカ几島ハ北の方を在て甚し小と寸其削立せる

岸より長く筋ありと其北隅、小あり礁ニツあり
て著よりと寸夫より九里許の平い海の深三十尋
にて夫より漸く減するし若船を北より此に遣るこ
の針路をカルとアルハドの二嶋の間、取てアルハド嶋
の戊辛の間三里許、在りある礁島サレ、ベチドと右よ
見へて丁未の間差未の方、正直とサレタ、クリユス城よ
向あり此城の北とて南とても碇を下寸、宜しと云
と、又此城とサレキユ島の好水あり所と共よ相通
するよ便ありと寸殊とサレタ、クリユスの南と最好と寸
入針路とサレタ、クリユスより差南とアルハド島と

シントカタリナ島の間、辺、特と無難ありと付此
て、逆爪の逢とも陸と近キも深四尋あり危
ありアルハドの濱、別して宜しとするあり
アトメレイ島とてホル子干満を測りて次の考と予
よ傳へりあり其考、此所の潮、甚し、不順にして
全く爪に由て変すと見ゆ満、北より来り干、
南より起る常よ海の方より爪吹来る北爪の動、時
ハ干ハ僅よ知べる程にて其時、二三時、過寸朔
望の大漲と諸種の試験にて其中教と取り四十
九分と寸盈梅満十日後満の極、至て三四時の間、
の時教と謂あり

僅き十一秒四十の加とし弟九月三日コッベコーケン
あてい八秒四二の加より弟七月八日ベテルスボルグ
こくい九秒三七の加とし弟四月龍動よてい四秒
八八の加して有しあり

一八五六号時計ハ千八百零四年弟一月二十四日サタ
クリユスの中教時より早きより三時二十九分三十二秒
五とし其日々の運行の疾キ其時より十四秒九四の減
よりテ子リハに於て弟十月二十七日ハ七秒五十の減
コッベコーケンに於て弟九月三日ハ五秒五六の減ベテ
ルスボルグに於て弟七月八日ハ七秒五一の減龍動

よ於て弟四月ハ二秒六十の減とす

このミシグトシの時計ハ弟一月二十四日サタクリユスの中
教時より後きより三時十六分二十六秒として日々の
運行ハ七分十一の加子リハに於て弟十月二十七日ハ
分三十の加コッベコーケンに於て弟九月三日一分八三の減
ベテルスボルグに於て弟七月八日五秒二一の加龍動に於
て弟四月零秒七十の加とす

羅盤の測ハ千七百十二年^{正徳}フレシールク徑驗ハ十
二度の北東差と云今二箇の羅盤の中教より後ふよ
七度五十分の北東差とす

奉使日本紀行

吉地 盈 譯
高橋景保 校

第五篇 伯西見と出帆大洋に至る
千八百零四年 文政 第五月二十一日 子口船の表檣二十廿
中檣出来り一故に兩船の水夫等晝夜力を尽して
其細具を造作して 同月三十日 甲比丹リシヤンスコイ
より 予を告て云 第五月二日 出帆すへ 支度
調へ 是に於て 第五月一日 予船夫に命じて 碇を
揚げ 彼測量具を船より取収り 免小舟を 使節の處に
送て 彼を迎へ 使節の兼て 此地の 徳司
の家より 逗留し 二日 船を 返り 来るに 徳司及

諸国等も共々船に伴ひ来たり此時三處の砦より
各鳴砲ありて侯節への礼あり予も船より十二鳴砲
を以て徳司へ答礼せしあり

我等既ニシトカタリナ島に逗留久しかり故に
ホルン岬に来る時候は甚しく風荒し時節あるに
兼て我思ふより一月より其岬と来過へんと計
しあれども三月より早くに彼處と来過へり
是故に務て取急し途中にて延滞ありしやう
はすす下り先よりコロンスタードにて兼て子に船を示し
バタゴテンの海濱ボルト、シント、シュリー、シントキリの諸島に

ルバヨイソトと相會するの處にあり。今ハ巴と得
此を變り甲比丹リヤレスコイの故を示したるに彼
別をサレユア岬スターテラントの東隅に於て三日の間
我船と待受へり若其日の内みなデスダ船の来ると
見ぬありり夫よりココセブチの港に向て船を遣て
其所ニ十五日我を待へり若我船サレユア岬の一方
にて別をさるるに彼は四月十二日より既に北緯四
十五度西経八十五度より過へり即ちロウシニタニ
諸島の内ユカリ嶋のホルトアニナマリアにて十日の
間我を待へり然るに君子の船は四月十二日より

北緯四十五度西徑八十五度の處に至るは時、是
其途中の難き事察せらる然らばコレセガチツの港
に向て其要用とする薪水等と速に取入て夫より直
にサシドウイク諸島に向て行へ然共ワツシゴト
に寄せ且ボルトアコナマリアにてナテスタ船の左右を
へりあり予ハヤシトマリヤ港に入り而してサシタキリス
チナ島のボルトマデレ、デ、シラスの入りすと思ふ是ハ
リユイテナント、へルゲストの説に従ふは彼港ハ其島ト
墨利加人の見出せる所トの諸利ヲ集め而して西墨利加
人ト甲比丹インガラムハ其委しき事ト記セたり

き予此島の事ハ詳にするを要とする
弟二月三日ハ北風烈しく我等ハ出帆を妨り此ハ
少ク潮の引く支へ船を流し這りて得ず四日の午正
前に至て船を出し昼後四時半に強に南風吹て兩
船共ハ帆を揚たり夕六時の初ハシントカタリナ島
の七分間の隅を廻り此トアルハシト島の間に針路
を取り七時ハ彼隅ハ船より南西七十五度にて六里
の距離ハ彼隅ハ我等ハ側ハ南緯二十七度十九分
十秒西徑四十七度四十九分二十秒とす此を予ハ此地
方と離り標とせり

此夜及い次日の烈しき南風にて雨は止す我等東
方より出で地方を離れ次の夜十二時、五十尋にして
底に至らぬ所より及小此時爪辰巳の間、轉しりる故
直に船を丙の方に向ひ地方の濱に泊りて遣ふ此爪の裏り
しより天気暗てストルムホーセル鳥の名北洋上より暴爪起らん
とす此鳥飛て船の舳板
下へ入て爪
と避くも既に船より飛たり其時我船は猶南緯
二十八度の所に在り一々八時、海を測りて六十五尋
ありて底は倍別この名あり予此にて丙巳の間、船
を進め弟二月七日天気晴明あり由て我度月離
の測量ありて此を午正の測り平均すりる船の

アルマナクにて従へり四徑四十六度三十四分十五秒と
コシノイサセセ、テス、ラムスより従へり四十六度五十二分三
十秒と寸時計にて四十六度四十分あり午正南緯
三十三度十六分四十秒と寸此日羅盤、千一度零二分の
北東差を見る

此日より予船中の水を入毎に量りて定めりてある鬼舟
より水夫より一日より一人前を式「ストウ」升量の名宛ト寸
升桶あり然し七船より居日本人より別々多くの量りて共あり
彼日本人共い甚し此事に憤り含めり様々見ゆ但予
水を惜む此よりワシントン島より

猶四月を經へりあれ、夫までの水と貯ふる事
船中第一の要務とすれ、あり、皆今度我船に伴ひ来り
— 日本人共、甚し我等に和せざるやうす、見ゆ其
愚昧あること、此度大なる恩徳を以て、本国に乘せ
歸りしむの恵まよ、少し感へるる氣色あり
常々予、戻り逆の色見べ和の色あり、懶り居たるは
彼共の性質と見ゆ、其衣服も身持も懶怠にして、
清潔あり、寸毫の暴怒— 易く唯其内一人六十歳
許の男、其餘人と異にして、彼にして、本国に歸
らしむ、我國帝の恩恵と感戴— たるや、

あれも餘人の却て此男を惡く嫌ひ同一國人
あれも此と相和すと又我船の日本通詞とも逐々
和順とす、侯第の此通詞は親をあるを見て、彼等顯
は通詞に當り愠をかきたるあり

辰巳間の爪漸く、夕刻間を轉し、予針路を全く南に
向ふ、此日の時、雨降り、時、暗き爪も効かり、あれ
南を走ると速くして、弟二月九日正午船は緯三十
七度三十八分十六秒徑の時計、従ふ、西徑四十七度三
十分、在ると朝二時、ユイテ、エト、エロ、ワ、コ、フ、夜
番に在て、海水の爪を由て騰起す、と見る、其水

線の如くそ交間と赤下間を引て火の畦を見る如く
ありしとシントカタリナを出てより日三十五里南西に
向て吹遣らんより南西の爪も此處を別れずするらん
と思ひしは此昼そ交間より東に十七里に於て其爪
の別あるを見出したり此爪の替りハ我等は今高
と東に離ちり二百四十里許あるりテ、テラ、プラタ
辺に在らん寸次の日此爪口を全く通り過たるは
その爪の力前日の如き同し向て三十二里即北東二
十八度三十分あり此日より天氣晴調にして然も逆
爪あり律三十七度の所まで初てアムバトロッス及

ホーゲルの類の諸島と見る律四十度の所まで種々の
海藻は流るゝ見り是ハ土地の近きハ在の徴とす然
とも我等猶国土を去度六百里に過たり羅盤針の
差漸く増し弟二月十七日船ハ律四十四度十五分徑
五十六度五十分の處にて羅盤四通り各六回の驗をか
して十五度十一分あり二十度四分四十秒に至り中
教を以て十七度三十七分五十分の北東差とす此時
南のイニキ^傾リナチイハ六十度四十一分あり此日
我等ハ教回月離の測を多しと總て四通各五
回の測驗にて中教五十六度五十五分二十五秒ホル

の餘にて五十七度零五分とし時計ハ五十六度四十分をありし也

弟二月十八日十九日ハ北爪烈しく空曇り霧深く劇しく雷鳴し雲暗く救時の中ハ子ハ船とも見へずありぬ夕九時ニ空暗そ夜ハ清明あり予霧合図ニ少く變りありて我按針役ヲ子ハ船ヲ遣たり此時海ヲ測るハ八十五尋にて底ハ灰色砂の黒点ありあり甲比丹リシヤンスコトも同く測りし其處ハ忽五十尋ニ至ると此日の午正ハ大陽高度ヲ測りしハ一ハホル子ハ天狼^星と參宿の四ハの高度ヲ測り八時

ハ我緯ヲ四十八度零三分とし徑度ハ前日測りたる時計の教ハ船行の教として比例ハ六十二度三十三分とし終の月離にて六十二度五十分す夜十時ハホル子ハ又畢宿五ヲ測りて時計ニ徑テ徑度六十二度四十四分す

トクトル、ホル子ルが此とし測量ヲ勤クを以て大陽の顯をより時ハ衣ハ星ヲ測リ常ニ船の在所の徑緯の教ヲ知得しありホル子岬にてハ其時酷寒にて行りし彼午ニセキスタンドを取て大陽の雲間より漏れ出ると伺い居ると予其寒氣ニ堪へ難うらん

を察して之を休めしむるも彼は予の言を聴き
あく必ず勤めしむる此に由て我北道航中三日天體
の實測を缺てありし全くホル子に勤く出る事
あり

スターラシアントの濱に至るまで日と夜度海の深と
測り其深大抵六十尋七十尋の間にて底地の灰
色沙と黒と少し光りある点あり又細く黒黄
の砂にてあり

弟二月廿日六時許の間勁爪あり後子に船より合
圖をとりて其船のコンスセイ
帆名下より一番目の破を
從橋に懸る帆あり

多しをとりて故に予我船を回して彼を待と
夕六時に子の船其帆を修理し終りあれ我等も
再び帆を揚しむ羅盤に此時二十一度四十分の北東
差あり船の緯に四十九度四十三分徑に六十五度十三
分とす夜よ入て風西よ向い船はハルタラド諸島と
バタゴニーの濱の中を在り其濱を見すして船を
西の方を遣り南より高濤起りて是れ船を押流
しむるも予猶此爪に由て尽く帆を揚て走り
たり此高濤は前日の暴爪に因て然るも非ず
バタゴニーの候二十九トイム三五に降り多れし劇

し、南爪の来らんとして、
かす我等、
甚く荒て見へる、
と沈むへ、程あり、
候、

従い十二度とす、
五十五尋水中にて十分時、
海の深、七十五尋あり、
の殊、船、
甲比丹リ、
示、

島に寄て碇す、
一且ラベロウ、
弟二月二十四日、
の東、
岬、
張て南東、
め置入、
七時、
走ら、

全濱

三十五里より四十里の隔を見ら其濱南より南東
より直り直條を引て東と西の向あり此島全く
峻峯にして海中に突起し所は狭し深谷を以
てせり其西より一箇の实地頗る北より向ふを見ら其出る
所は鈍頂ある礁の如し此尖はサレ、ダイゴ岬と見ゆ
是はヒュールテンド(テララ、テル、ヒョウゴ)の東隅にて
入し、マイル海峡の北に此辺より夥しく鯨を見
たり今朝日出の前より當番の士劇しく水の逆る
音を聞て驚き船中より火を矢すると思へり是
鯨の水を逆るありし一俣爪を以てマイル海峡を通

行するは宜しとすれども予思ふに航海者の多く徑
驗せしマイル海峡を行くは烈爪は逢の危あり
とあれはスターラドを乘廻すを好むサレユ岬
を廻るの損は速に針路を西に取りて償ふべし
唯此爪にて海峡を通行するのとの利は暴爪の
恐ありては好む所とすあり

十一時サレユ岬正しく我南に當り空暗朗に
て視際明あれは予サレユ岬の徑度と我時計の示
す所は後い測り此甲比丹ローク及び其地航海の
驗と比校し見る

トクテ、ホル子のシトカタリナミ逗留セリ間ニ
船の時計の運行を校正スル由テサレニ岬乃
徑度を算スルニ

一 二八号の時計ハ 六十三度四十二分三十秒

一 八五六号 六十三度四十九分四十五秒

甲比丹 コーク 六十三度四十七分

甲比丹 ブリク 六十三度十八分〇〇

アッロウスミトマレスビスニ後フ 六十三度四十分〇〇

子ハ船時計 六十三度四十七分〇〇

此甲比丹コークの數ニ 甲比丹コークニ 殆人ニ半度

差ヘリヲ除テ其餘ニ コーク、マレスビス及ヒ我兩船の
時計の諸數唯七分四十五秒の不同あり是故ニコーク
の數ハ此眞の徑度ニシテ其他ハ唯數分を異ニスル
而已此ニ由テ觀セバ地球上の僻遠島の杓礁の
徑度ハ尤細審を要スルニ 歐羅巴大地の所ニ
測ルモノナリ重ト守故ニ此ニ精詳スルニ航海
者の為ニ利益トスルの大ナル知悉スルニ
正午の緯度ニ從ヒ我船ハサレニ岬ニ至三十三
里ありト寸此所ナリ彼岬を見セバ早ク高峰の
其兩側漸ク陵遲スル如ク其地猶東方ニ延ルニ我

里ありと見のヨウヤールスエイレドと我等見得ず
して適く夜中静ある爪にて舟を遣るといふも
測量と舟道の筭は少の差と見寸是れ我幸と彼地
と離るると遠く見の甲比丹コークの説に此地は
海里十二里即尋常の三十六里より近く時は暴爪は
逢ふありニユヤールスエイラントの港へ入るは非を於
近く来へり寸とありあり

此日は甚く清朗にして夕發間の風あり夕に
壬亥間の爪とあり正午の比はサユア岬の霧を掩
見へ寸夕七時大陽の西に傾くは就て又雲より顯

れ出り其時と彼岬と見え猶二ツの小あり峻削
りる峯あり四分時と経て全く見へ寸あり夕六時北東
より南西に吹烈爪は来り走りたるは海上彼此全く
風のある所あり望み見たり是れ恐くは諸方より
相及する爪あるの徴あり一海潮は北東に向く
高く漲り此夜及び翌朝に至り高潮最甚くは
あり八時にホル子に諸星の高度を測り緯五十四度
四十六分と寸此と舟道の筭は比すれは十五里猶北
ありと寸翌日午正の測は従は北に二十七里東に十八
里と差と寸

我船のサセユア岬を廻る時、程々北爪は終夜南へ
向て走り、西へ轉せしめられ、朝八時、算するに
已にホルン岬より数分南に過たり、寸尔後猶針路
を西へ取、早時許を過て、未だ間の大爪起り、夜に至て
全く西爪となり、我等唯マルスセイルを置て、おんり
終日アルバトロス鳥の名前のゼースワリ、ユウ鳥の名前及び諸種の
ストルムホーゲレ鳥の名前を見たり、夜に入ても爪暴く
時々疾爪は雨霰を降らせり、翌朝に至て爪漸く靜
まり、船の帆救を増らるる、涛高く爪と相逆して
船の盪漾を甚くす、バロメーターハ昨日、二十九

ドイム、二十ハドイ、半は降すなり、今ハ二半り
ニイ針りぬ、然れども天気宜し、わすしと見へ、寒きと
テルモメーターハ三度は降りたり、是ハスターテシフレットの境
よて今迄より地方の異ありと標す、おんり諸
トカタリナリ、スターテシフレットよて我等二十一日
かして渡りたるハ爪の便宜好く、わすし連ありし
あり、然れどもスターテシフレットを廻り、ホルン岬に近
き此より天氣寒く、常に曇暗にて、南西の逆爪、
幾分偏し、数日の内はホルン岬を廻り、大洋の
好地方より出るべきを得んと願ふ所は、幸し西爪

續て我等の望を得て船の速あつた事測る
為に瑕ありと恐るゝありあり

正午の暗くれども二時より疾風起り我等幸
して帆を取收め其風益強く五時より空曇り
視際五六度の高より雲層層と柱のくく黒暗雲
中に顯りれども景色いかに又すむ
あり我等ストルムセイナル帆の外に皆取り收め
て暴風の備を候へ候へ候へ震の暴風来り我
分時の間ありてやい辭りしれども風の烈
しく止寸終夜劇しく高涛起りバロメーターハ

初の疾風の時よりニ降りしれども預め暴風雨
の用意して夜を明したり此暴風の西と南西
時、替り吹き朝に至りてやい緩み登り及て堪へ
くあり大陽も現るれども我等測量する事と
得て緯五十八度二十三分経六十四度のところ
至り又疾風吹来り八時、又南西の烈風吹て其劇
しく前へ過て我等

の内にて幸

して之を免るゝ不あり此に由て涛益々高く朝
及て心風猶劇く時烈しく震雪を吹送りぬ
此暴風の間唯ウーの内小島の船の周囲に飛

多りと見ゆ好而己めして他諸島を見ず夜よ
至て爪始めて緩き次日ハ爪も堪へし三月廿
暗好の天気とありテルモメートル舢板上にて極寒
度と降る四分度の一トし棚頂にて十四日の間
三度の上の温あり此日以我輩皆舢板上より出て
暗光とて温煖と取り衣服帳杯ハ尽く大陽ニ乾
たりわのてを寒き氣候に逢てハ船の蕩漾
堪へず時ハ常ニ船夫の居所は多く火爐を置
て煖ませし又船夫の番する一人ハ命して番
當る彼の衣を火に烘り靴も干し等總て意を

用いしあり此暴爪の中ニ我船の前の方ニ漏れ
ろを見ゆ故に舟上を繩にて下らしめて之を
檢する最外の板に漏穴あるを見出して銘を
延く之を塞ぐと又スターラコードを糸回る間ハ
碇綱を解ゆめ置し此三日三夜ハ船の徑
緯を測り得たり此日之を測ると我船暴爪
の間ニ北ニ二十五里東ニ四十二里吹送られ六日
の内ニサシユア岬の西ニ一分の進みあり然し
北爪漸く吹起り我等の願は適ししと見ゆ
今まで船中ニ一人ハ病患あり者ありしは

此間中の悪しき天気一日も霧あり、
あつて、危き病の種も萌生さへ、
幸と尤恐を慎み、
意を用ゝあり

羅盤の船の南緯五十八度五十九分西徑六十三度四十七分
在り時計の二十四度三十二分の北東差七十三度十五分の南傾りす

北爪益吹暮り夜に入り船の走九或十コイブ
直西より走りて翌朝八時の算より、
ホールン岬と既
よ衆回し大洋に出たりと覺也



Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on the left page. The text is arranged in vertical columns and includes characters such as 大, 小, 一, 二, 三, 四, 五, 六, 七, 八, 九, 十, 十一, 十二, 十三, 十四, 十五, 十六, 十七, 十八, 十九, 二十. The page shows signs of age and wear, with some ink bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on the right page. The text is arranged in vertical columns and includes characters such as 一, 二, 三, 四, 五, 六, 七, 八, 九, 十, 十一, 十二, 十三, 十四, 十五, 十六, 十七, 十八, 十九, 二十. The page shows signs of age and wear, with some ink bleed-through from the reverse side.

琳琅閣

